

【桃太郎と鬼ヶ島の若妻】

◇登場人物◇

男性――

- ・桃太郎：桃から生まれた剣士。真面目な性格で、戦いに強い
- ・善次：桃太郎の育ての父。柴刈りで生活している
- ・犬養：軍犬を採り入れた傭兵団の長。気性は荒いが、良いまとめ役
- ・商人：鬼ヶ島と交易を行う町の商人。イシの父
- ・ビヤツカ：イシの夫である赤鬼。根は優しいが、短気で情緒不安定
- ・サンゴ：鬼ヶ島の港で商売をしている青鬼。ビヤツカの親友
- ・ウラ：鬼ヶ島の酒蔵の長。陽気で器量が大きく、凄まじい力持ち
- ・その他……

女性――

- ・イシ：ビヤツカの妻。好奇心旺盛で快活な性格
- ・オト：善次の妻。桃太郎の育ての母
- ・雉野：山で狩りをする部族の長
- ・その他……

子供――

- ・イツカク：ビヤツカとイシの息子。歳は幼いが、利口で実直な性格

※地の文はナレーション

その昔、暖かい国のある山村に、慎ましくも穏やかに暮らす一組の老夫婦があつた。

妻のオトは不妊の体であり、庭で赤色の木の実や様々な薬草を育て、それらを長年食べて来たが、月の血が止まる歳まで、ついぞ子宝に恵まれることはなかつた。

夫の善次は、村の男達と車を引いて、山の柴を刈つて暮らしを立てていた。

ある日、オトは着物を洗いに川へ出かけた。

すると、何やら赤い実のようなものが川の流りに身を任せて転がって来るのが見えた。

それも恐ろしく大きく、手に提げて来た洗濯籠を越えようかというほどだった。

若い頃からの習慣で、赤い実が目がないオトは、何やら知らぬが、さぞや美味しいに違いない、夫と分けて食べようと、これを持ち帰ることにした。

オトは慌ただしく裾を捲り上げ、思い切つて川へと足を入れた。

流れて来た実はまさに巨大で、持ち上げてみると、重さは見た目以上だった。

よくよく見ると、これはどうやら桃の類であるようだ。香りもなかなか良い。

オトは気持ちが踊り、早速桃を抱えて家に帰った。

オトの力では、桃と着物の両方を一度に運ぶことは出来ず、この場所と家とを往復せざるを得なかつた。

日が暮れる少し前、喜々として待っていたオトの元に、善次が帰つて来た。ところが善次は手を怪我しているようで、痛々しく布を巻いていた。

オト「おかえりなさい。その手はどうしたんですか？」

善次「ああ、蜂に刺されてしまつてな」

善次は申し訳なさそうに笑った。

オト「それは大変でしたね。体は良いのですか？」

善次「うむ、医者に行つて、毒を抜いてもらったよ。ちよいと腫れてしまつたが、大丈夫じゃ。それよりオトや、それは桃かね？」

善次のあつけらかなとした様子に、オトの注意は再び桃へと移った。

オト「そうそう、着物を洗いに行つたら川を流れて来たんです」

善次「へえ、桃が川を流れていた」

オト「それはもう驚きましたよ。善次様と一緒に食べようと思つて、抱えて参りました」

二人は声高に笑つた。

善次「有り難いことじゃ。一人でこんな大きな桃を、大変じゃつたろう。どれ、早速割つてみよう」

善次は荷物を降ろし、包丁を取りに行つた。

オトが慌てて止めに入る。

オト「いけませんよ、怪我をされているではありませんか。ここは私がやります」

善次「いいんじゃないよ、お前は座つてなさい」

オト「いいえ、布を巻いた手で包丁を振り回されたんでは、今度は足を切りやしないかと恐ろしいです」

善次「そうかい」

オトは包丁を手に取り、大きな桃を縦に切り込んだ。

その時オトは、包丁の刃が種に当たる感触に、兎を切ったような鈍い手応えを覚えた。

その形は規則的な卵型でなく、ある所は飛び出て、ある所はへこんでいるようだった。

オトが刃を下ろし切ると、突然、桃が前後左右に揺れ出し、切り口が不気味に開閉した。

善次「何じゃ、桃が動いとるぞ」

老夫婦は咄嗟に立ち上がり、桃から一步後ずさった。

と、その時、オトは桃から滴る汁が不自然に赤いのに気付いた。手に持った包丁に目をやると、刃先にもわずかながら真っ赤な液が付いている。

それは紛れもなく、鮮血であった。

オト「化け物！」

オトは悲鳴を上げ、恐れおののき、包丁を投げ捨てた。

善次「どうしたんじゃ」

オト「血……血です。桃から血が出ているんです」

善次「なんと……化け物じゃ、この桃は化け物じゃ！」

二人はあまりの出来事にすくみ上がり、なすすべなく桃を見つめていた。

すると、切り口から何やら枝のようなものが突き出した。なんとそれは赤子の手であった。

オトは震える手で包丁を拾い、恐る恐る桃に手を差し伸べた。

善次「近づくでない。食われるやもしれんぞ」

善次が警告する。

しかし、オトにはなぜだか、桃に閉じ込められた赤子を救わねばならないように思われてならなかった。

オトは覚悟を決めて、切り口から指を突っ込み、桃を左右に引き裂いた。

信じがたいことに、あの大きな桃の中には、人間の赤子が入っていた。頭から背中にかけて切られ、おびただしい血を流し、悲鳴にも似た産声を上げている。

善次「たまげた……」

善次が言った。

オトはもはや絶句し、呼吸さえままならず、口を押さえた。そして、血の付いた包丁を床に落とし、気を失った。

【2】

善次が手に巻いていた布で赤子の血を止め、医者に連れて行ったことで、赤子は一命を取り留めた。幸い傷もそれほど深くはなかった。

もしもあの日、善次が手を怪我しておらず、力任せに桃を切っていたなら、赤子の命はなかったに違いない。

オトもやがて事態を受け入れ、桃に入っていた赤子を天からの授かりものと考え、喜んだ。

赤子は文字通り桃から生まれたことから、『桃太郎』と名付けられた。桃太郎は徳に厚く、愛情深き夫婦に育てられ、気高くたくましく育っていった。

成長が少年から青年に差し掛かる頃、桃太郎は剣術を習うようになった。桃太郎は武人としての稽古に明け暮れたが、それでいて、庭仕事や山の手入れも決して疎かにすることはなかった。

——鬼ヶ島の港市場。

車一杯の金銀財宝を前に、青鬼のサンゴは困り果て、半ば呆れ返っていた。

サンゴ「そうは言われても、こちらとてどうすることもできなう」

人間の国から来た商人の一族が、こぞつて頭を地面につける。

商人「お願いします。お願いします。一目で良いので、どうぞ娘に会わせてくださいませ」

サンゴ「何度も言うが、イシはここを痛く気に入っていて、国には帰りたくないと言っている。それにこのような宝を持ち込まれても、置き場もないし、我々には使い所がない。頼むからイシの件は忘れてくれ」

商人は一向に引き下がらない。

商人「おイシは大切な一人娘なのです。娘が無事ならばそれで構いません。どうか、どうか顔だけでも見せてくださいまし……この通り」

そこへ、買い物に来ていた鬼の娘達が通りかかり、人間の財宝に興味を持った。

娘1「これ、可愛いわ」

娘2「お飾りも素敵じゃない。私はあれがいい」

サンゴが宝に触れようとする娘の手をはたいた。

サンゴ「やめなさい。これは売り物ではない」

商人「いいえいいえ！」

商人が素早く立ち上がり、置物や首飾りを娘の手に押し付けた。

商人「貢物でございますので、どうぞお好きなお納めくださいませ」

青鬼は白目を剥いた。

サンゴ「もう一度説得はしてみるが、あまり期待するな」

商人は再びサンゴに向き直り、膝をついて拝み倒した。

商人「はい、何卒、何卒、お願い致します」

その後、商人の一族は、鬼から虫除け線香や酒、気付け薬などを一通り買って帰った。

一方、ウラの酒蔵の働き手である赤鬼のビヤツカは、人間の国から来た娘、イシと、一人息子のイツカクと三人で暮らしていた。

イシとの出会いは五年前に遡る。

イシが港市場で商売を見学していた所を見初め、鬼ヶ島の銘酒『猛蘭』を勧めたのがきっかけだった。

鬼を恐れず、媚も売らず、快活で好奇心旺盛なイシに、ビヤツカは惹かれたのだった。

それからというもの、ビヤツカはイシの一家が買い付けに来る度に、密かに手紙を渡すようになった。

イシもその想いに応え、手紙を通じて、ビヤツカや鬼ヶ島についてよく聞くようになった。

た。

イシは言う。

「イシ」こちらの暮らしは平和すぎて、退屈です」

ビヤツカは応えた。

「ビヤツカ」それならば、鬼ヶ島へ来るがいい。ここでは毎日が新しい」

イシはビヤツカの誘いに乗り、鬼ヶ島で生きることを選んだ。

二人の想いは次第に強まり、やがて激しい恋に落ちた。無論、平易なことではない。人間の国において、鬼は恐るべき怪物なのだ。

人間が鬼と恋をするなど、ましてや女一人で鬼ヶ島へ移るなどとは、禁忌を乗り越えて自殺行為に等しかった。

それ故、イシは黙って事を起こした。ビヤツカのこと、鬼ヶ島へ行くことも、何もかも秘密のまま、ビヤツカに遣いを出してもらい、鬼の船で鬼ヶ島へと渡ったのだ。

ところが、折り悪く、イシが鬼と共に船に乗り込む所を見た者があり、人間の国では商人の娘が鬼にさらわれたとして大騒ぎになってしまった。

無理もないことである。鬼の一族には、人間の国で盗みを働く不届き者や、人を病み付きに陥れる奇つ怪な妙薬を陰で売り捌いている輩がおり、人々の間では、鬼に関する悪い噂が絶えなかったのだ。

以来、商人の一族はイシを取り戻そうとあの手この手を尽くし、品を変え、言葉を変え、鬼の逆鱗に触れぬよう、かろうじて交渉を続けて来たのである。

当のイシは、鬼ヶ島での刺激に満ちた暮らしの虜となっており、国に帰るところか、親に会うことすら拒む有り様だった。

ほどなくして、イシはビヤツカの子を身ごもる。半鬼半人の血を引き、一角鬼として生まれたことにちなみ、子は『イツカク』と名付けられた。

しかし、そんな彼らの幸福も、長くは続かなかった。

イシがビヤツカの家事や仕事を手伝うようになると、初めこそ有り難がつて喜んでいたビヤツカも、やり甲斐を失ったことで徐々に手を抜くようになり、分担の比重が少しずつビヤツカからイシに移った。

生来活発でやりたがりなイシもまた、子育ての苦もあつて、小言の一つも言うようになつたが、ビヤツカはほとんど耳を貸さず、むしろ闇雲に反発するばかりで、ひどい時には酒に酔つて怒鳴つたり、手を上げることさえあつた。

気の強いイシも、さすがに鬼には敵わない。ビヤツカの横暴に、イシは黙つて耐え忍ぶほかなかつた。

イシの愛情は、もはやビヤツカよりもイツカクに注がれていた。

【4】

夜、山中の宴広場で、鬼達が高々と燃える焚き火を囲み、音楽を奏で、歌い、踊り、酒を飲んでいた。

中でもビヤツカの妻、イシは焚き火の赤い光に妖しく照らされながら、日頃の憂さを晴らすように、裸同然の姿で若々しく踊り狂っていた。

鬼達はイシの大胆で繊細な踊りに魅了されており、彼女が踊りを終えると、惜しめない拍手喝采で彼女を讃えるのだつた。

鬼1「こんな奥さんがいて、ビヤツカは幸せ者だな」

鬼の男達が口々に言った。

イシ「それはどうかしらね」

イシが体の汗を布で拭いながら会話に割って入る。

イシ「あの人だったら、近頃ろくに働きもしないで、私が文句を言うと怒るのよ」

鬼1「そうなのかい？ 全く、身の程知らずな野郎だ」

別の鬼が盃を持って席に割り込んだ。

鬼2「何？ ビヤツカの奴、お伊シさんのことが気に食わないって？」

イシ「そうみたい。よくわからないけど」

イシが答える。

鬼2「それはちようどいい。それならお伊シさんはおれが代わりにもらってやる」

イシ「駄目よ、イツカクもまだ小さいのに」

イシと鬼達は一斉に笑った。

そこへ、港市場の頭、サンゴが現れた。

サンゴ「イシ」

イシは声の方へ振り返るやいなや、嫌気が差したように上を向いた。

イシ「またお父様？」

サンゴ「ああ」

イシが着物を羽織り、鬼達の輪を抜けてサンゴの元へ歩み寄る。

イシ「国へ帰る気はないって言ってるでしょう」

サンゴ「今度はそうではない。『帰らなくてもいいから一目会いたい』とのことだ」

イシは溜め息をついた。

イシ「私はこつちで幸せにやってるって、商人の娘には戻りたくないって、ちゃんと伝えてくれた？」

サンゴ「もちろんだ。だが、どうも信じてくれないように見える。恐らく、あちらは我々がお前をさらったと思ってる」

イシ「はあ？　なんで？」

サンゴ「鬼だからだ」

イシ「……馬鹿じゃないの」

イシは宴広場の焚き火に体を向け、何かを忘れるように、演奏に合わせて、頭やかかとを上下させた。

サンゴ「ビヤツカとは上手く行っているのか？」

サンゴが後ろから尋ねた。

イシ「まあ、それなりよ。子供も生まれちゃったし、ビヤツカは私のことなんて召使くらいにしか思っていないみたいだし」

サンゴ「そんなことはない。ビヤツカは今でもお前を愛している」

イシ「だといいけど」

イシは音を立てて燃え上がる焚き火を静かに見つめたまま、振り向きもしなかった。

【5】

——人間の国。

日の傾く少し前、善次の一行が山道を下り、町へと向かっていた。車には山積みの柴、背中には一人一人茸や薬草の入った籠を背負っている。

中でも桃太郎は一人で二人分の荷物を背負い、それでも足取りは誰よりもしつかりしていた。

男1「桃太郎さんは若いのによく働きますな」

男の一人が言った。

桃太郎「若いからこそですよ。体も鍛えねばなりませんし」

桃太郎が応えた。

男1「頼もしい限りですじゃ。この頃は町にも鬼が出ると言いますからな」

桃太郎「鬼？」

男1「へい。鬼ヶ島からこの国へやって来ては、畑を荒らしたり宝を盗んだりしてるそ
うです。一度なんぞは、若い娘が鬼にさらわれて、ついぞ戻らなかつたとか」

桃太郎「そんな悪い奴らがいるのですか」

桃太郎は歩きながら、人を襲う鬼を思い描いた。

善次「案ずるな、桃太郎や」善次が言った。「こんな昼間に鬼なんぞ出やせんて。わしも長いことここを通るが、鬼を見たことはないのう」

桃太郎「そうですね」

桃太郎は笑った。安堵したのが半分と、一瞬とはいえ、鬼と出会ったらどうしようかと本気で案じた自分をおかしく思ったのが半分であった。

——山道の脇に、旅装束に身を包んだ四人組の一行が座り込んでいるのが目に入った。彼らは焚き火をするでもなく、食事をするでもなく、ただ黙々と座っていた。

桃太郎「あの人達、何をしているのでしょうか？」

桃太郎が誰にともなく尋ねた。

男1「さあ、寝ておるのではないですか」

桃太郎「寝るなら横になれば良いものを」

善次の一行が四人の前を通り過ぎようという時、彼らは徐ろに立ち上がり、一行の通り道を塞ぐように広がった。

男達は車を止め、彼らを見た。

男2「鬼じゃ……」

誰かが小声で言った。

鬼3「ここを通りたきや、持つてる荷物を全部よこしな」

旅装束の一人が一行に向かって言った。

善次が応える。

善次「すみませんな、旅のお方。これはわしらの売り物ですじや。中身はただの枝や草ですし、わしらが売らねば値も付きません」

旅装束の一行が笠を脱ぎ捨て、顔を露わにした。四人の肌は鮮やかな赤色や青色を
していて、まるで染め物のようだった。

そして、頭にはそれぞれ固有の形をした、鋭い角が生えていた。

鬼3「よこさないなら殺すまでよ。どの道荷物はおれ達がいただく」

鬼達は羽織物の下に隠し持っていた金棒を出し、一行ににじり寄った。

善次「待て、待て。わかった。命までは取らんでくれ」

善次が風呂敷を下ろし、慎重に後ずさった。

善次「皆も荷物を下ろすのじや。死んでは元も子もない」

男達はうろたえながら善次に従った。

だが、桃太郎だけはじっと動かなかった。

鬼3「それでいい。後はどこへでも消えろ」

鬼は言い、桃太郎に金棒を向けた。

鬼3「お前もだ、小僧。魂どっか行っちゃったか？」

善次「言う通りにするんじや、桃太郎。殺されるぞ」

善次が慌てて忠告する。

桃太郎「これはぼく達が働いて集めたものだ。おいそれと差し出す訳にはゆかん」

桃太郎が棒立ちのまま言い放った。

善次「馬鹿者！」

駆け寄ろうとする善次を、他の男達が必死で押さえた。

鬼3「そうか。ならば、あの世へでも持ってゆけ」

鬼が金棒を大きく振り上げ、桃太郎の頭めがけて力いっぱい振り下ろした。

刹那、桃太郎は鬼の一閃をわずかな動作でかわし、一瞬のうちに金棒を奪い取った。

これを皮切りに、四人の鬼が一斉に桃太郎へと飛び掛かった。

縮こまつて動けずにいる男達を尻目に、桃太郎は二人分の荷物を下ろすこともなく、手にした金棒を自在に振り回し、鬼の一団と勇猛果敢に戦った。

次々と襲い来る鬼の攻撃をもともせず、足を砕き、腕を打ち、桃太郎はどうとう、全ての鬼を叩きのめしてしまった。

桃太郎「人々を苦しめる鬼というのはお前達か」

桃太郎が尋ねた。

鬼の一人が、瀕死の体を震え上がらせながら、どうにか声を絞り出した。

鬼3「いや、おれ達は……おれ達は初めてだ。これまでに人間を襲ったことはない」

桃太郎「嘘をつくな。お前達のせいで人々が困っている」

息一つ乱さない桃太郎の、ある種冷徹な気迫に、鬼達は怯え切った声を上げた。

鬼3「ち、違う！ それは……おれ達じゃない。他の鬼がやったことだ」

桃太郎「今回は命だけは見逃してやる。ぼくは曲がったことが大嫌いなのだ。二度と悪さはするな」

桃太郎は無造作に金棒を放り捨てた。

桃太郎「行きましよう」

善次の一行は束の間、呆気にとられていたが、下ろした荷物を背負い直し、苦痛にうめく鬼達を気にしながら、町への道を再び歩き出した。

【6】

町では鬼による盗みや暴力の被害が常態化しつつあり、人々は対策の為に躍起になっていた。

その為、桃太郎が鬼の盗賊団を撃退した話は、瞬く間に町中へ広まった。

そのうち、桃太郎が柴を売りに町へ出れば、必ず一度は鬼について聞かれるようになったし、時にはわざわざ家を調べ、用心棒を頼みに来る者さえあった。

彼らの声を聞くうちに、桃太郎自身も、鬼との決着を付けることに、何か使命感いたものを感じるようになっていった。

そんなある日、町に大きな店を構える商人が桃太郎の元へやって来た。

桃太郎が善次とオトと三人で夕飯を食べている最中であつた。

商人「桃太郎様、もはや私達にはあなたよりほかに頼れる人がありません」

桃太郎「どうしました？」

桃太郎が箸を置いて尋ねた。

商人「私は鬼ヶ島で酒や薬の買い付けをしております」

オト「鬼を相手にですか？」

オトが驚いて口を挟んだ。

商人が話を続けた。

商人「はい……。鬼にしか作れない代物もございまして、裏では鬼と商売をする者もおるのです……。ですが、それが間違いでした。

実は、五年ほど前から、仕事を教えようと、娘を鬼ヶ島へ連れて行っておつたのです。おイシと申しまして……。気の強い子ですが、それはそれは美しくて。

娘は不幸にも、鬼に気に入られたらしく、ある夜、鬼に無理やり連れ去られてしまったのです……」

桃太郎は、瞬間、背中に熱い何かがこみ上げて来るのを感じた。初めて鬼と対峙した時に覚えた、怒りと勇氣、高揚感と緊張感、そして、自分がやらねばならぬという使命感の入り混じった、静かなる衝動を。

商人が続けた。

商人「あれ以来、持てる限りの財をはたいて、何度となく話し合いをして来ましたが、鬼どもは娘を返すどころか、ただの一目たりとも会わせてさえくれません。ずいぶん前に一度だけ、娘から預かったという手紙をもらったのですが、どうやら鬼どもの慰みものにされているようなのです……」

商人は悔しさのあまり、下げた頭を腕の中にうずめ、声を上げて泣き出した。

善次「それはひどい……」

善次が思わずつぶやいた。

桃太郎「娘さんは無事なのですか？」

桃太郎が尋ねた。

商人は顔を上げず、やっこのことで「わかりません」と答えた。

桃太郎はこれまで、幾度となく町の人々から鬼にまつわる相談を受けていた。

用心棒、畑の見張り、倉番、いくつかは引き受けたこともあったが、いずれも鬼が現れることのないまま夜を明かし、働いた気がせず、どこか虚しい心持ちだけが残るものだった。

しかし、虚しさの大元が、今ようやくわかった。桃太郎には、自分だけに課せられた責務があったのだ。今こそこれを果たす時だ。桃太郎はそう思った。

桃太郎「父上、母上。ここまで育ててくださり、有難うございました」

桃太郎は姿勢を正し、善次とオトに深々と頭を下げて言った。

オト「馬鹿なことを考えるでないよ。鬼ヶ島へ行こうだなんて」

しかし、桃太郎の決意もまた一通りではなかった。

桃太郎「腹は決まっています。ぼくが鬼を退治し、必ずやお伊しさんを取り戻します」

オト「桃太郎や……」

オトは涙ながらに立ち上がり、桃太郎の肩をあらん限りの力で抱いた。

オト「お願いだよ、行かないでくれ。私達にはお前しかいないんだよ……」

善次「桃太郎や。鬼ヶ島へ行けば、命の保証はない。ごろつきの相手とは訳が違うぞ。それでも行くと言うのかね？」

善次が問う。

桃太郎「お伊しさんは、今まさにその渦中であって、助けが来るのを待っているはずで。彼女はきつと生きている。ここで逃げる訳にはゆきません」

善次「そうか」

善次はオトをそっと立たせ、元いた座布団の上に座らせた。それから、優しい声色で語を継いだ。

善次「それならば、まずは一旦寝なさい。目が覚めても尚、その決意に変わりがなければ、お前の好きにするが良い」

商人はやつとこのことで顔を上げ、

商人「お願いします、お願いします……お礼は何でも致します……！」

と、声を絞り出して桃太郎に縋った。

【7】

——鬼ヶ島、ビヤツカの家。

ビヤツカは酒蔵の仕事をすっかりイシに任せ、朝から一人酒を呑んでは寝て過ごしていた。

そこへ、港市場の頭、サンゴが様子を見に来た。

ビヤツカは突然の来訪者に驚き、また、それ以上にばつが悪く、苦し紛れに頭を掻いた。

ビヤツカ「何の用だ？」

サンゴ「イシから聞いているかもしれないが、一族がまた貢物を持って来た」

ビヤツカ「ほう……そうか」

イシの家族が貢物を持って来る。それは、イシを国へ連れ戻す為の交渉を意味する。

だが、鬼ヶ島に住んでいるのはイシ本人の意思にはかならない。にも関わらず、人間達はなぜか鬼の機嫌を取りたがる。ビヤツカにはそれが不思議だった。

サンゴ「ご両親はイシの無事な顔を一目見られればそれで満足だそうだが、肝心のイシがへそを曲げてしまつてな。倉は一杯だし、売る訳にもゆかん。これ以上物を増やされても困るのだ。お前からも何とか言つてやつてくれないか」

ビヤツカは肩をすくめ、無気力に首を振つた。

ビヤツカ「おれが何を言つたつて無駄さ。頑固な女だからな」

サンゴが座敷の隅に腰を下ろした。

サンゴ「人間との暮らしはどうだ」

ビヤツカ「楽しんでるように見えるか？ 冗談じゃない」

サンゴ「何が気に入らない？ カミさんは働き者で、美人で、子供も元気で、まさに完璧な暮らしじゃないか」

ビヤツカ「はあ……。何といふかな……。イシはちよつと、自分勝手なんだ。何でも一人で決めようとする。おれの考えなんて眼中にない。おれのことを役立たずだと思つてる」

サンゴ「なるほど。イシは頭が良いからな。百年前と違つて、今は腕っ節で勝負する時代じゃない」

ビヤツカ「そう、だから何か新しいことを始めてみようと思つても、おれがああでもないこうでもないつて工夫を凝らしてる間に、イシがしびれを切らして片付けちまうんだよ」

サンゴ「どうしたつて人間には敵わんよ」

サンゴが笑いながら言った。

ビヤツカは俯いたまま首を振った。

サンゴ「嫌いなのか？」

ビヤツカ「……そんな訳ない」

サンゴ「無理はするなよ。最悪、国に送り返すのも一つの手だ。それは子供の為でもある」

ビヤツカ「違う……。イシのことは今でも愛してる。冷めちまったのはあいつの方だ」

サンゴ「お前は どうしたいのだ」

ビヤツカ「おれは……正直な所、自分でもどうしていいかわからない……」

サンゴ「ならば、以前のように酒蔵へ行って、好きなだけ働くが良い。それでひとまずは元通りだ」

ビヤツカ「それが……、最近なんだか体が妙に重いんだ。少し子供の相手をしただけで息が上がっちゃうし、寝ても寝ても疲れが取れん。この分では仕事にも戻れるかどうか……」

サンゴが立ち上がり、腰の帯を締め直した。

サンゴ「お前は気負いすぎだ、ビヤツカ。出来のいいカミさんと比べることはない。何でもかんでも要領よくやろうとするから腰が重くなるのだ。大事を成すより凡事を徹底。今のお前にやれることだけをやれば良い。そうすれば、自ずと気力も湧いて来る」

ビヤツカは少し考えた後、何かを閃いたように、何度か小刻みに頷いた。

ビヤツカ「……そうか。わかった。確かにそうだ。しばらく、イシのことはあまり気にせず、おれなりにやってみよう」

その後、ビヤツカは眼の色を変え、家中を隅々まで掃除した。座敷はもちろん、棚の隙間やかまどの中までちり一つ残さなかった。

すると、酒の酔いはみるみる醒め、重りを引きずっているようだった体もめくるめく軽くなった。

淀んでいた床や家具が輝く度に、イシの喜ぶ顔が目に見えた。

そうするうちに、ビヤツカは失われていた内なる誇りが返り咲くを感じ、錆びの中に埋もれかけていたイシに対する純粋な愛情を思い出した。

ビヤツカ「こんなに簡単なことだったのか」

生まれ変わった家の真ん中に立つて、ビヤツカはそうつぶやいた。

それから、夕飯の支度をした。元より料理は得意でないものの、それでも一生懸命に、イシとイツカクに少しでも美味しいものを食べさせようと、不器用ながら真心を込めて飯をこしらえた。

そして日暮れ前、イシが仕事から帰って来た。

ビヤツカはその時、イシに贈ろうと手紙をしたためている所だった。

イシは初め、ビヤツカが家を掃除したことに気も付かない様子だった。

しかし、いつも灰と煤にまみれていたかまどが新品同然に磨かれているのを見て、「あら、凄く綺麗になつてる」と感嘆の声を漏らした。

ビヤツカは書きかけの手紙をさりげなく書き続けたが、かまどからそそくさと戻って来たイシがそれに気づいた。

イシ「何書いてるの?」

ビヤツカ「いや、これは……」

ビヤツカは筆と手紙を背中に隠した。

イシ「かまどを掃除したの?」

イシが尋ねる。

ビヤツカ「ああ」

イシ「そう……いったいどういう風の吹き回し?」

ビヤツカは一瞬、眼を泳がせ、咳払いをした。

ビヤツカ「その……今まですまなかった」

イシ「何が?」

ビヤツカ「何でもお前にやらせちまって……こんなはずじゃなかったんだが」

イシ「……ふうん」

イシはゆつくりとまばたきをした。それから、ビヤツカの背中の辺りを指して、尋ねた。

イシ「で、何書いてるの?」

ビヤツカ「これは、まだ書き終わってない」

イシ「じゃ、書いて」

ビヤツカ「わかった」

ビヤツカが手紙の残りを書く間、イシは完璧なまでに磨き上げられた家中を眺め、膳に乗せられた料理を品定めするように見下ろしていた。

しばらくの後、ビヤツカが手紙を書き上げ、後ろからイシに手渡した。

イシは振り向きもせず、それを目で読んだ。

イシ「これ、口で言えない？」

読みながら、イシが背中越しに指摘する。

ビヤツカは頭を掻いた。

ビヤツカ「おれは、口が上手くないから……」

やがて、イシが手紙を畳んで、ビヤツカの目を見上げた。

イシ「ねえ、あなた働く気あるの？」

ビヤツカ「もちろんだ」

どこか自信なさげなビヤツカに、イシが詰め寄る。

イシ「じゃあ聞くけど、なんであなたが家の仕事してる訳？ 酒蔵の仕事がどれだけ力使うかわかってるでしょう？ みんなあなたが来るのを待ってるの。なんで私が行くことになるの？」

ビヤツカ「明日から行くよ……」

イシ「駄目、今行って。まだ今日やること終わってないんだからね。私はイツカクのご飯作りに帰って来ただけ。見たところ中途半端だから後は私がやる。本気で真面目に働く気があるんだったらちゃんと証明して。今すぐ」

ビヤツカは目を泳がせ、両手を広げた。

ビヤツカ「イシ……。頼むから、おれの気持ちも少しはわかってくれ……。！」

イシ「ねえ、馬鹿じゃないの？ いつも大変なのはこっちなんだけど。私あなたの母親じゃないのよ」

ビヤツカは失望した。こんなつもりじゃなかったのに――。

もはや自棄になるほかなく、家を出ようとするビヤツカに、イシが追い打ちをかけた。

イシ「またその態度？ これからはきちんと話し合うつて――」

ビヤツカ「仕事だよ！」

イシの言葉を遮るように、思わず怒鳴った。

イシは一瞬たじろいだのような目をし、黙り込んだ。それから、今度は小声で

イシ「……もういいよ」

と、諦めたようにつぶやき、かまどの方へきびすを返した。

ビヤツカ「おい」

咄嗟にイシの腕を掴むビヤツカ。

イシはその手を乱暴に振り払った。

ビヤツカ「何なんだ！」

ビヤツカはイシの襟首を掴んで、自分の方へ向き直らせた。

瞬間、イシは殴られることを予期したのか、強く目を閉じて歯を食いしばった。

すると、イシの怯えた表情に、ビヤツカは少し冷静さを取り戻した。

ビヤツカ「すまん……傷つけるつもりはなかったのに……」

イシは唇を噛み締め、膝や手を震わせながら、どこか遠くを見た。その目から涙が伝った。

ビヤツカはいたたまれず、イシの体を抱き締めた。

イシは抱き返して来るでもなく、かといって嫌がる訳でもなく、ただそこにじっと立っただまま、ほとんど動かなかった。まるで人形を抱いているようだった。

イシ「……これじゃあ言いたいことも言えないじゃない……」

イシが子供のような声で言った。

何も言えないのはビヤツカも同じだった。

ビヤツカ「……行つて来る」

それだけ言い残し、家を後にした。

ビヤツカは振り向かなかつたし、イシも何も言わなかつた。

——一方、人間の国。

ほどなくして、どこぞの武将が鬼との戦を計画しているという噂が町を覆い尽くした。

桃太郎はただ、商人の娘イシと、騙し取られた財宝の奪還を訴え、上質な刀を安く譲ってくれる者を探しているに過ぎなかつたのだが、それが人から人へと伝わるうちに、尾付きひれ付き、「鬼との戦」へとすり替わっていったのである。

噂を聞きつけた武人の中に、獰猛な犬をけしかける犬使いの部族の長、犬養がいた。

鬼ヶ島の戦利品に興味を抱いた犬養は、噂の出処を突き止め、少数の兵士と犬を引き連れ、交渉の為に桃太郎の元へと出向いたのだった。

ところが、桃太郎が武将ではなく、一介の柴刈りであることを知るやいなや、当てが外れたとばかりに、

犬養「鬼を相手に戦を仕掛けようとは、いかな猛き豪傑かと思えば、若造のたわ言だったか」

と、意地悪く一笑した。

桃太郎は犬養の非礼を意にも介さず、

桃太郎「戦と言えば大仰だが、たわ言ではない。ぼくはこの間、鬼の盗賊どもに丸腰で襲われたが、返り討ちにしてやった。疑うならば父上に聞くがいい」

と言り返した。

犬養「わざわざ聞きに行くまでもない。鬼を倒したというのが本当ならば、今、おれが斬りかかろうとも、敵わぬことはあるまいな」

犬養が挑発する。

桃太郎「来るならば来い」

桃太郎は眼の色一つ変えずに応えた。

桃太郎「その代わり、ぼくが勝ったら、その腰に差した刀を売ってもらおうぞ」

犬養は癪に障ったように目を細め、それからまた笑った。

犬養「馬鹿にされたものだ。もしお前が勝とうものなら、その腰につけたきび団子と引き換えに、軍勢もろともくれてやるわ」

犬養は犬を座らせ、配下の者達から木刀を受け取ると、その一振を桃太郎に投げ渡した。

犬養「若造とて、手加減はせん。例え死んでも化けて出るなよ」

両者、木刀を構え、睨み合う。

一瞬の静寂の後、犬養が「えいやあ！」と声を張り上げ、上から斬りかかった。

それを桃太郎が木刀で受ける。

鏝競り合いにもつれ込むかと思いきや、桃太郎は犬養の体を造作もなく押し崩し、切っ先を喉元に突き付けた。

犬養はさりげなく避けたふりをし、立ち位置を戻した。

桃太郎「勝負あったな」

絶句しながら顔を見合わせる兵士達をよそに、桃太郎が言い放つ。

犬養「馬鹿を言うな。おれはまだ斬られておらぬ」

構え直す犬養の表情からは、余裕の笑みが消えていた。

犬養「ええい！」

再び犬養が斬りかかる。

桃太郎は神がかり的な紙一重の見切りをもって犬養の渾身の一撃を右へかわし、即座にその胴を打ち叩いた。

犬養が声にならない声で呻く。

完全に桃太郎が勝った。

が、犬養は木刀を投げ捨て、桃太郎の胸ぐらを掴み上げた。

犬養「おのれ……！」

往生際悪く恫喝を凶る犬養に、桃太郎は尚も怯むことなく、目にも留まらぬ早業でこれを組み伏せ、馬乗りになって押さえつけた。

桃太郎「ぼくの勝ちだ」

すると、犬養は桃太郎の顔を睨みつけながら、何やら徐ろに

犬養「雪崩……！」

と唱えた。

次の瞬間、おとなしく座り込んで事の顛末を見守っていた三匹の犬が、突如鞭で打たれたように猛然と走り出し、一斉に桃太郎に襲いかかった。

犬達の突進は桃太郎の不意を突き、その体を勢い良く押し退けて倒した。犬達は桃太郎の体中に食らい付いて、どんなに暴れても決して放さなかった。

その隙に犬養が立ち上がり、服の乱れを整えた。

犬養「やめ」

犬養の掛け声を聞くと、犬はたちまち噛み付くのをやめ、二人の一騎打ちを見守る兵士の輪の中へ駆け戻った。

桃太郎は手や脚から血を流しながらも、息一つ乱さず立ち上がり、空手のまま身構えた。

桃太郎「もうよせ。犬を傷つけない」

犬養はしばらく歯噛みしながら桃太郎を睨んでいたが、やがて、決心したように、刀に手をかけ、鋭い足取りで歩み寄った。

兵士1「犬養殿！」

配下の者達が慌てて声を上げる。

犬養は桃太郎を間合いに入れると、刀を鞘に収めたまま腰帯から引き抜き、水平に差し出した。

桃太郎が犬養の目を見つめたまま動かないでいると、犬養が低い声で言った。

犬養「腹を立ててすまなかった。忌々しいが、約束は約束だ」

その言葉に、桃太郎は構えを解いた。

犬養は負けを認めたのだ。

桃太郎「かたじけない。貴殿の勇氣、決して無駄にはしない」

そう言つて、桃太郎は懐に大切にしまつておいた錢の入った巾着を差し出した。

桃太郎「これがぼくの持てる限りの財産だ。少ないが、受け取つていただきたい」

犬養は巾着には目もくれず、応えた。

犬養「刀を売るのではない。軍勢ごとお前のものだ。おれは約束通り、そのきび団子をもろう」

犬養の配下の者達は、口にくそ出さなかつたが、動揺を隠せない様子だつた。

犬養「皆の者、文句はあるまいな」

犬養の問いかけに、兵士達は黙つて下を向いていた。

桃太郎「あれは売り言葉に買い言葉、よもや本気で言つた訳ではなからう」

桃太郎が諫める。

犬養「それでも武士の端くれだ。一言はない」

犬養の目に迷いはなかつた。

桃太郎が少しためらいながら刀を受け取ると、犬養が尋ねた。

犬養「鬼ヶ島へ行くのだろうか？ 兵はどれだけある」

桃太郎「兵はない。ぼく一人だ。そもそもこれは戦ではない。鬼にさらわれた娘と、奪われた宝を取り返しに行くだけだ」

犬養は一瞬、面食らったような顔をしたが、すぐに何かを悟ったように笑った。

犬養「見上げた奴だが、やはり若造だな。我々が乗り込んで行つて『返せ』と言った所で、鬼が聞く耳を持つとも思えぬ。やるからには決死だぞ」

桃太郎も危険は承知の上だった。相手は冷酷無比な人外の獣。それも本拠地に乗り込むのだ。先のごろつき退治とは状況が違う。

桃太郎は犬養とその軍勢に言った。

桃太郎「元より一人で行くつもりだ。討ち死にが怖い者は無理について来なくても良い」

犬養「……見返りは何とする」

桃太郎「名誉だ」

犬養は腰に手を当て、ゆっくりと歩き回った。

犬養「嘘かまことか、鬼ヶ島では、良い砂鉄が採れると聞く。勝った暁には、それを山分けでどうか」

桃太郎「砂鉄に興味はない。好きにするが良い」

すると、犬養はしめたとばかりに笑みを浮かべ、手を差し出した。

桃太郎は、オトがこしらえたきび団子を袋のままその手に握らせた。

犬養「おれにいくつか当てがある。武人ではないが、連れて行けば必ず役に立つだろう」

犬養はそう言つて、桃太郎に二人の人物を紹介した。

一人は、弓矢を射る狩人の部族の長、雉野である。雉野の一族は山で狩りをしており、弓矢の技は飛ぶ鳥を射抜くほど精密で、毒や罠にも詳しくかつた。その知識と技術は、山の動物を狩るばかりでなく、野盗から身を守るにも充分であるという。

それでもう一人は、学者の猿渡である。猿渡は地質と植物に明るく、兵学もかじつていた。

こうして、桃太郎と犬養の軍勢に、雉野の一族と猿渡が加わることとなり、決戦の準備は着々と進んでいった。

【10】

——鬼ヶ島、ウラの酒蔵。

ビヤツカが酒蔵に着くと、インが戻るのを待っていた働き手達は驚いたようにビヤツカを見つめた。

鬼4「おお、ビヤツカじゃないか」

鬼5「久しいな、ビヤツカ。仕事して行くか？」

彼らが口々に声をかける。

ビヤツカは生返事をしつつ、酒蔵の頭であるウラを探した。

しばらく見ないうちに、酒蔵の様子は所々変わっており、乱雑に収められていた道具の数々は見事なまでに整理され、また、あらゆる仕事の手数が細かな工夫の積み重ねによつて短縮されていた。

ウラはちょうど、ビヤツカの持ち場で米を蒸している所だった。

ウラ「お、カミさんにどやされたかい」

ウラはビヤツカの存在に気付くと、齒の抜けた口でいたずらっぽく笑いかけながら言った。

ビヤツカ「すまんな……」

ビヤツカは目を合わせられなかった。

ただ、ウラと仲間達が何事もなかったかのように自分を明るく迎え入れてくれたことに、少し安堵してもいた。

ウラは手ぬぐいで両手と顔を拭うと、ビヤツカに歩み寄り、彼の肩に手を置いた。

ウラ「謝る相手を間違えちゃあいかん。お前さんのことを誰が一番心配していたと思う?」

察しは付いた。が、すぐには受け入れられなかった。

ウラ「おいしさんだよ」ウラが言う。「お前さんがいつ戻って来てもいいように、いつも頑張ってくれていたんだから」

ビヤツカは複雑だった。

ビヤツカ「あいつには感謝してるんだ。大変な思いをさせちまったことも、謝った。本当だぞ。きちんと謝った……礼だつて言ったんだ……」

ビヤツカの落ち込みぶりを見て、ウラは高らかに笑った。

ウラ「こりゃあよっぽどこっぴどく絞られたな。まあ無理もないよ、お前さんが悪い」

ビヤツカ「おれだって、本当は頑張りたかったんだ……こんなふうになるなんて、おれだって……」

ウラ「わかったわかった、もう気にしないの。おいさんだって馬鹿じゃないんだから、大丈夫さ」

ウラの相変わらずな陽気さに、ビヤツカは少しおかしくなって、堪えきれず、俯いたままわずかに笑った。

ウラ「ほら、元気元気。働け、あほたれ」

ウラはからかうように、ビヤツカの体を何度か殴った。

【11】

——ビヤツカの家。

イシは座敷の上へたり込んだまま、ビヤツカの残した手紙に何度も目を通していた。

彼の綴った言葉には逃げも偽りも嫌味もなかった。

イシは自分がやってしまったことの意味に気付き始めた。ビヤツカは不器用で短気で気も利かないが、純粹な好意でイシとの仲を取り戻そうとしていたのだ。

イシは自分が情けなくなつた。

けれども、イシの方にも言い分はある。

イツカクがいる手前、安易にビヤツカを捨て置いて一人になれなかったのもあるが、どれほど不釣り合いであろうとも、家事も仕事も懸命にこなし、出会った頃のビヤツカ

が戻って来るのを心のどこかで待っていたのは、結局、今もビヤツカを愛しているからに他ならない。

ただ、ほんの少しでも良いから、わかって欲しかった。

イシが手紙を握り締めたまま思案にふけていると、突然戸が開いた。

イツカク「——ただいま帰りました！」

イツカクが帰って来たのだ。

イシは咄嗟に顔を隠し、かまどに向かった。そして、ビヤツカの用意した膳を座敷へ運んだ。

イシ「おかえりなさい」

イツカク「うん」

イツカクは、早くも何かがいつもと違うことに気が付いたらしく、膳の上の食事を興味深げに注視していた。

イツカク「今日は父さんが作ったの？」

イシ「え？」

イシは驚いて、イツカクの目を見つめた。

イシ「なんでわかったの？」

イツカク「美味しくなさそうだから」

イシは思わず吹き出した。

イツカクは、角が一本しかないことを除けば、姿形は鬼そのもので、顔立ちもビヤツカに似ているが、察しが良いのは自分に似たのだと、イシは信じていた。

鬼は人間より何倍も長く生きるが、子供の成長は人間より速いようで、イツカクの成長段階は、もはや幼年期から少年期に差し掛かっていた。

イツカク「父さんは？」

イツカクが尋ねる。

イシ「仕事」

イシは平静を装い、箸に手をつけた。この子には、自分達がつい先ほどまで言い争いをしていたことがわかってしまうのではないかと、イシは内心落ち着かなかった。

イツカク「そっか」

イツカクはどこか寂しそうにつぶやくと、それ以上何も聞いて来なかった。

これでもイシは、親同士が上手く行っていないことなどイツカクにだけは悟られまいと努めて来たつもりだった。

が、彼も彼で、そんな二人が醸し出す何とも言えない空気の淀みに気づいていないふりをし続けていたのかもしれない。

——その夜、イシはまた、一人で鬼達の宴広場に顔を出した。だが、いつものように踊る気にはなれず、椅子代わりに置かれた木の幹に腰掛けたまま、煌煌と燃え上がる焚き火や、火術師達が織りなす色鮮やかな炎を見つめていた。

鬼達は変わらず陽気であり、思い思いに歌い踊り、酒を呑んで笑い合っていた。

サンゴ「踊らないのか？」

不意に、横から声をかける者があつた。

見ると、サンゴが歩み寄つて来ていた。

イシ「気分じゃないの」

イシが応える。

サンゴはイシの隣に腰掛け、しばらく何も言わず、ただただ宴の様子を眺めていた。

イシ「鬼つてみんなああなのかしら」

ふと、イシが尋ねた。

サンゴ「ああととは？」

イシ「なんていうのかな……馬鹿で短気で、融通が利かなくて、自分勝手に」

サンゴ「かも知れん。——人間は難しすぎる。あいつの手に負えないのもわかる」

イシ「何それ」

イシが笑つた。

それから、サンゴが聞いた。

サンゴ「ビヤツカは相変わらずか？」

イシ「まあね……。今日ちよつと泣きながら怒ったらやつと仕事行つてくれたけど、また殴られそうになつちやつた。帰ったら何言われるんだろう、私」

サンゴは口を閉じたまま溜め息をついた。

火術師達の放った青白い火の玉が五個、六個、焚き火の周りで高く跳ね回り、拍手と歓声が上がった。

サンゴが重々しく語を次いだ。

サンゴ「しつこいようだが、なぜ国へ帰らないのだ？」

イシ「だって——」

イシは火薬の臭いに眉をしかめ、顔を背けた。

イシ「——子供もまだ小さいし、商人になんかなりたくないし、国はつまらないし……」

サンゴは黙ったまま、小刻みに頷いていた。

イシが焚き火の方へ向き直り、

イシ「私の居場所って、どこにもないのかな……」

と呟いた。

イシ「(咳をする)ゴホ、ゴホ……」

サンゴ「大丈夫か？」

イシ「うん、大丈夫——(咳をする)ゴホッ……!」

言い終わると同時に、イシが再び咳き込んだ。

サンゴ「どこか悪いのか？」

イシ「違う……臭いで——（咳をする）ゴホッ、ゴホッ……！」

イシは言葉の途中でむせ返つてしまい、それ以上喋れなくなった。咳は更に激しくなり、呼吸もひどく乱れ始めた。

イシ「はあ、はあ、ゴホッ……」

サンゴ「イシ」

イシは弱々しく立ち上がり、咳き込みながら炎に背を向けた。

イシ「この、臭い、ゴホ、ゴホッ……駄目みたい……ちよつと——」

一歩二歩歩き出したところで、イシが横向きに倒れた。

サンゴ「イシ！」

サンゴはひざまずいてイシの顔を見下ろした。

火術師「どうした？」

焚き火の方から、火術師の頭が駆け寄って来た。

サンゴ「具合が悪いらしい」

サンゴが答えた。

火術師はイシの顔を見て、

火術師「人間か……!!」

と息を呑んだ。

火術師はすぐさま振り返り、両手を振って叫んだ。

火術師「鬼火を消せ！ 人が倒れた！」

炎を操っていた鬼達は、「人だと？」とざわめきながら、次々と青い火の玉を捕まえて箱の中に封じた。

鬼1「大丈夫か！」

鬼2「お伊シさんが倒れたつてよ！」

宴に盛り上がっていた鬼達も続々と駆け寄って来た。

火術師の頭がひざまずいて、伊シの顔を上に向けた。

幸い、伊シの気は確かなようだ。

火術師「あんたの妻かい？」

火術師の頭がサンゴに尋ねた。

サンゴ「いや、友の妻だ」

火術師1「鬼火に生気を吸い取られておる。静かな場所へ連れて行って、休ませなさい」

サンゴ「わかった」

サンゴがイシの上体を抱え上げた。

イシ「平気……歩けるから」

イシが消え入りそうな声で言い、サンゴに肩を借りながら、どうにか自分の足で立った。

火術師「酒は呑んだか？」

火術師の頭がイシに問うた。

イシ「少し……」

火術師「ならば吐け。酒が回ると死ぬぞ。すまぬ、人間がおるとは知らずに」

サンゴがイシを支えながら麓に向かって歩き出した。

その背中に、火術師が続けてまくし立てた。

火術師「頭を高くして、水をうんと飲ませなさい！ 病人には決して近づけるな！
それから、丸一日は甘味を食わすなよ！」

【12】

山を下り、宴広場の喧騒が聞こえなくなった頃、イシとサンゴは海の見える崖の近くに腰を下ろし、足を休めることにした。

イシ「ごめんなすってね。付き合わせちゃって……」

サンゴ「おれは構わん。具合はどうだ？」

イシ「うん……だいぶましになった」

崖から見下ろす海には大きな月が照り輝き、空は雲ひとつなく、無数の星に覆い尽くされていた。その明るさは、浜の向こうの森の木々まで見えるほどだった。

イシは、ふと五年前を思い出した。鬼ヶ島の美しさを教えようと、ビヤツカに連れられて、島のあちこちを歩き回った日々のことを。

ちょうど、今見ているのとよく似た景色を、ビヤツカと一人で眺めたことがあった。あの時、イシはまるでこの世の全てを手に入れたような気がしていた。

いつも新鮮で官能的な、幸せな毎日が、この鬼ヶ島では永遠に続くと思っていた。

それがいつからか、日常は色褪せてしまった。

頼り甲斐があつて、会う度に眼を輝かせていたビヤツカさえ、今や見る影もない。

いつからこうなってしまったのか。あの頃にはもう戻れないのだろうか。遠い波の音を聞きながら、イシはずっと考えていた――。

ビヤツカ「――イシ」

ふと、男の声で目を覚ました。

どれくらいの時が経ったか、イシはいつの間にか、サンゴの肩にもたれかかつて眠ってしまったようだ。

サンゴが声のした方へ振り返った。

イシもおぼろげな意識の中、そちらを見上げた。

そこには、二人が歩いて来た山道の真ん中に立ち尽くす、ビヤツカの姿があった。

イシははつとして、サンゴから体を離した。

ビヤツカはイシの名を呼んだきり、何も言わず、こちらを向いて立っていた。

イシはまだ、酒の酔いと鬼火の障気が抜け切っておらず、サンゴの横に座り込んだまま、どうすることも出来ずにビヤツカを見つめていた。

サンゴ「……ビヤツカ」

代わりに、サンゴが反応した。

ビヤツカは頭を掻いて、

ビヤツカ「……その、お前達——」

と言いかけた。

サンゴが口を挟むように

サンゴ「具合が悪くなったのだ。鬼火に生気を奪われて」

と、少し大きな声で遮った。

ビヤツカ「……大丈夫か？」

ビヤツカはイシに辛うじて聞こえる声で尋ねた。

イシは目を泳がせながら、ゆっくりと頷いた。

ビヤツカは顔をこすり、

ビヤツカ「ああ、面倒を見てくれたのか。すまないな」

と言うと、麓に向かって歩き始めた。

サンゴ「待て。カミさんを置いて行くことはないだろう」

ビヤツカは立ち止まって、背中を震わせながらすすり泣いた。

ビヤツカ「おれは……、おれは、ただ……」

サンゴが腰を上げ、言った。

サンゴ「イシはお前の妻だ。家まで無事に連れ帰ってやれ」

ビヤツカはためらいながら振り向いて、サンゴとイシの顔を見た。頬を流れる涙が月明かりで煌めいた。

そして、二人の顔を肩越しに見つめながら、力のない足取りで再び歩き出した。

サンゴ「ビヤツカ、待て」

サンゴが語気を強めて呼んだが、今度こそ止まらなかった。ビヤツカはそのまま、足早に山を降りて行った。

サンゴ「誤解を与えてしまったようだ」

イシ「……いつものように」

イシはそう言ったが、本心ではなかった。

ビヤツカの眼には、今までに見たことのない、寂しさと失望が宿っていた。

もう、かつてのように互いを想い合うことは二度とないのではないかと、イシは少し不安に思った。

しばらくして、サンゴが「歩けるか？」と尋ねた。

イシ「うん……」

イシはサンゴに手を引かれ、ゆっくりと立ち上がった。まだ少し吐き気とめまいが残っていた。

その時ふと、山の上の方が奇妙に明るいことに気づき、不思議に思っただちらを見上げた。

イシ「あれ何……？」

木々に遮られて明瞭には見えないが、遠くの空に巨大な煙が上がり、その煙が赤く照らし出されているように見えた。それはちょうど宴広場の方角だった。

サンゴ「山火事だ……」

サンゴが息を呑んだ。

イシ「え……」

イシは瞬間、広場の鬼達を案じた。

サンゴ「逃げよう。ここには危ない」

サンゴがイシの手を引いた。

イシ「待って、みんなが——」

サンゴ「奴らは自力で逃げる。行ったところで火は消せん」

イシはサンゴに引つ張られて走り出したが、とても鬼の足について行ける体ではなかった。

サンゴ「ああつ……!」

直後、サンゴが突然短いうめき声を上げ、苦しそうに立ち止まった。見ると、腰に細長い棒きれが突き刺さっているようだった。それは弓矢だった。

イシ「え……?」

サンゴ「何だこれは……」

サンゴは自分の身に何が起きたのか確かめようと、矢の刺さった所を手で探った。

と、茂みの中から女の声が聞こえた。

雉野「射るな、娘に当たる」

サンゴは声のした方を一瞥すると、「焼き討ちか」と呟き、腰に刺さった矢を引き抜いた。それから、突然イシを肩に担ぎ上げ、一目散に山を駆け下りた。

サンゴ「ビヤツカ! 聞こえるか! 山が燃えている!」

イシ「ちよつと、何?」

サンゴ「ビヤツカ! おれがイシを連れて村へ降りる! 決して上がって来るな! 聞こえたか! イシは無事だ!」

イシがサンゴの肩の上でどうにか顔を上げると、弓を携えた者達が何人か、茂みをかき分けて山道に出て来るのが見えた。

恐ろしいことに、月明かりに照らされて浮かび上がったその者達は、明らかに人間の姿をしていた。

彼らは追つて来ず、イシの視界から消えるまで、こちらをじつと見つめていた。

【13】

——これより少し前。桃太郎と犬養、雉野らの率いる討伐隊が、猿渡と船乗り達を船に残し、鬼ヶ島の山林を押し進んでいた。

猿渡の調べによれば、港のある海岸は見通しが良すぎ、夜でも上陸を悟られる恐れがあった為、桃太郎達はあえて島の反対側へ回り込んで、岸壁を登り、森の中を抜けて来たのだった。

やがて、一行は鬼達が広場で宴を催しているのを見つけたが、そこに商人の娘の姿は見当たらなかった。

雉野ら狩人の一族は木々や茂みの中に潜み、狩りに使う罠を仕掛けた。

桃太郎と犬養の軍勢は密かに広場を取り囲み、一斉に鬼達を襲った。

彼らは初め、何が起きたのかわからなかったと見えて、多くはほとんど抵抗することなく、その場で斬られて死んだ。森に逃げた者は罠にかかるか、雉野の一族が放つ毒の矢に当たった。

事態を理解した者は、木や石や火の着いた薪を拾って、人間の軍勢と激しく戦った。

鬼の力は凄まじく、犬養の兵士のかかなりの数が戦い敗れて死んだ。

中には火を吹き、青い火の玉を操る鬼もおり、火だるまとなったり、鬼火の瘴気に倒れる兵もあつた。

桃太郎は犬養から譲り受けた一振りの刀で、襲い来る鬼を次々と斬り捨てていった。混沌とした戦いの中、鬼火の一つを繋いでいた糸が切れ、鬼の手元を離れて森の中へ転がり込み、草も木もまたたく間に燃やした。

その間、雉野が捕らえた鬼の一人からイシの居所を聞き出したので、討伐隊はいくつかに分かれてイシを探しに向かった。

傷を負つて動けなくなつた者や、畏にかつた者は、火に飲み込まれていく森に捨て置かれた。

野山での狩りに熟達した雉野達は、音もなく山を下り、それからほどなくして、山道から少し外れた崖の近くで鬼に囚われていたイシを見つけたのである。

雉野の配下の一人が弓で鬼を射たが、鬼はほとんど怯まず、イシを盾にしたまま走つて逃げた。

雉野は指笛を吹いて、犬養らを呼んだ。

犬養「いたのか？」

犬を連れて駆けつけた犬養が尋ねた。

雉野「ああ、見つけたよ。でも連れて行かれちまつた」

犬養「何か落とさなかつたか？ 履き物でも、かんざしでも」

雉野は血の付いた矢を見せながら言った。

雉野「鬼がこいつを落として行った。『娘はおれがいただいた！』とかなんとか叫びながらね……くそ、反吐が出そうだわ」

犬養は矢を受け取り、犬に血の匂いを嗅がせた。

犬養「まだ食われてなければいいが」

鬼の血の匂いを覚えた犬が、山道に残された足跡を辿るように走り出した。

犬養がそれに続き、他の者は互いを見失わぬよう、広がって後を追った。

【14】

——ビヤツカはイシ達に見られぬよう、山道を歩かず、崖を伝って山を降りた。そして、月明かりの下、波打ち際の岩に腰掛けて、失意と惨めさに一人むせび泣いていた。

妻が親友に惚れた。イシの心はもはやサンゴのものとなったのだ。

確かに、今の自分とサンゴを比べて、自分が勝っている所は何一つない。自分は長い間イシを大切に出来なかった、当然の報いなのだ、ビヤツカは思った。

もはや情けなくて、イシにもサンゴにも、イツカクにも合わせる顔がなかった。

もしも自分に、この静かな海に入って死ぬ勇気があったなら、いつそそれが一番楽かもしれない。

ビヤツカ「イシ……。おれは……。おれは、ただ、お前を喜ばせたくて……」

また、涙が止まらなくなった。

ビヤツカ「おれは……、お前が好きだった。お前の前では、もつと……もつと、なんだ……、いい男でいたかったのに……」

その時、崖の上の方からサンゴらしき声が聞こえた気がした。

ビヤツカははつとして耳をすました。気のせいだろうか？

同じ声がもう一度聞こえた。

サンゴ「おれがイシを連れて村へ降りる！ 決して上がって来るな！ 聞こえたか！ イシは無事だ！」

今度は確実に気のせいではなかった。その声は、何やらただならぬ危機的な語気を帯びている。

ビヤツカは奇妙に思い、海に飛び出した岩を伝って、山の上を見上げた。

すると、山奥の方の空がぼんやりと陰っているのが見えた。しばらく考えて、煙が上がっているのだとわかった。

ビヤツカ「山が燃えてるのか……？」

かなり遠いが、この森はウラの酒蔵まで続いている。もし大事になれば、酒蔵が燃えてしまうかもしれない。

ビヤツカは衝動的に、酒蔵に向かおうと決意した。

崖を降りることは出来たが、登ることは出来ず、酒蔵に行くには浜を回り込んで村を通り抜けなければならなかった。

ビヤツカは走った。一度も止まることなく。

村に辿り着く頃には、山頂近くが巨大な火の海と化し、立ち上る煙まで赤々と染まっているのが見えた。

【15】

サンゴはイシを担いだまま山道を駆け下り、やがて森を抜けた。

サンゴ「——はあ……、はあ……」

イシを地に下ろすと、片膝をついて深く息を切った。

傷は思いのほか深かったようで、腰布が血にまみれていた。

イシ「大丈夫……？」

イシがサンゴの肩に手を置く。

サンゴ「ああ……、ここまでは、追って来るまい……。ここからは、歩け……」

イシ「うん……」

サンゴは傷口を押さえながら、イシは燃え広がっていく山を振り返りながら、村に向かって歩いた。

——もうじき村が見えようかという所で、後ろから小さな足音が近づいて来た。それはものすごい速さであった。

二人が驚いて振り返ると、一匹の犬がこちらに駆け寄って来るのが見えた。

サンゴ「犬か」

サンゴが安堵の溜め息をつき、犬を撫でようとしやがみ込んだ。

が、犬は二人の手の届く所までは来ず、突然立ち止まってしきりに吠え始めた。

すると、草木や岩の陰から、続々と黒い人影が現れて、あつという間に二人を取り囲んだ。それは抜き身の刀を携えた男達であった。

イシは絶句し、腰を抜かしそうになった。

犬養「そこを動くな」

中でも大柄な男が威圧するように言った。

男達は刀を構えながらこちらににじり寄って来る。刀身が月明かりを受けて怪しく光っていた。

サンゴはゆっくりと腰を上げ、イシの前に立ち塞がった。

サンゴ「何が欲しい？」

犬養が地面に唾を吐き捨てた。

犬養「町の商人の娘だな。イシと言ったか。お前で間違いないか？」

イシは恐怖のあまり何も答えられなかった。

サンゴ「連れ戻しに来たのか」

サンゴが言う。

犬養「ああ、そうだ。神妙に娘を渡し、命乞いすれば、命までは取らぬ。観念しろ」

サンゴ「……わかった。だが、先に刀をしまえ。子分も引き上げさせろ」

犬養「この外道が。おれに命令出来る立場ではなからう」

イシが震えながらサンゴの肘に触れた。

サンゴ「(小声で)信用するな」

その時、犬養の犬が何かを察知し、二人の脇を抜けて、鬼達が暮らす村の方へ駆けて行った。

犬養「根城を見つけたか」

犬養が呟き、手を高く上げ、それからゆつくりと前方を指した。

サンゴ「何をやる気だ」

サンゴが眼の色を変えた。

犬養「どうしても良からう。早く娘を渡せ。さも無くば斬る」

犬養の体から殺気が滲み出た。

サンゴ「わかった！ 降参だ。娘を渡す」

サンゴはそう言うと、イシの腕を掴んだ。

イシ「え、待って……やめて」

イシはどうかにか声を絞り出した。

犬養「案ずるな。お前を救いに来たただけだ」

イシ「私は……帰りたくない……」

その時、サンゴがイシの体を村の方に突き放した。

サンゴ「逃げろ。ビヤツカの所へ」

犬養「やれ！」

犬養がそう叫ぶと、男達が一斉にサンゴに斬りかかった。

サンゴは複数の刀を素手で受け止めながら、敵を蹴飛ばして応戦した。

更に、森の木々に隠れていた多数の兵士達が姿を現し、村の方へ火矢を放った。

イシ「やめて!!」

サンゴ「逃げろ! 早く!!」

サンゴが体中から血を飛ばしながら叫んだ。

イシは村に向かって走り出した。

が、兵士の一人がすかさずイシを捕らえた。

イシ「放して!!」

サンゴがイシを捕まえている兵士の肩を引っ掴み、力任せに握り潰した。

兵士1「ぐああああああ！！」

兵士は絶叫しながら後ろ向きに倒れた。

イシは再び走ったが、別の兵士にあえなく捕らえられ、地面に押さえつけられた。

サンゴは背後から刀で刺され、刀身が腹から突き抜けたまま膝をついた。

上空を飛び去った無数の火矢が村に到達し、まもなく家々から火の手が上がった。

イシは力の限り声を張り上げた。

イシ「逃げて！ 逃げて！！ イツカク！！」

サンゴは苦し紛れに腹を突き破っている刀を掴んだ。

兵士の一人がサンゴの首を横から叩き切ったが、骨で止まった為、勢いをつけて切り直した。

そして、何度目かで首が落ちた。

イシは両腕を縄で縛り上げられる間、子供のように泣き叫んだ。

まもなく、犬養の軍勢が雄叫びを上げながら鬼達の村へ斬り込んで行った。

【16】

イシ「放して——！！」

ウラの酒蔵への道中、聞き覚えのある叫び声に、ビヤツカは思わず立ち止まった。

ビヤツカ「イシ……」

声の聞こえた方角へ振り返ると、夜闇の中を飛んで行く無数の光が見えた。

イシ「逃げて！ 逃げて！！ イツカク！！」

姿は見えないが、やはりイシの声に違いなかった。それも尋常ならざる激しきで泣き叫んでいる。

ビヤツカは居ても立つてもいられず、抜けて来た村へと引き返した。

それから、村の家々が見る間に燃え上がるのを見た。

ビヤツカ「馬鹿な……」

それからほとんど間を空けず、刀や槍を持った大量の人影が列をなして村になだれ込むのが見えた。着ている服や立ち居振る舞いから、少なくとも鬼ではないことが容易に見て取れた。

人影は次々と村の家に入り込んで行く。各家から怒号と悲鳴が飛び交った。

ビヤツカはようやくやく、村で起こっていることを完全に理解した。人間が大挙して襲って来たのだ。

ビヤツカ「やめろ！！」

ビヤツカは力いっぱい叫んだ。が、彼の声はこの騒ぎと炎の音にほとんどかき消された。

ビヤツカが村に入る頃、辺りは逃げ惑う鬼達とそれを追う人間達で混乱を極めていた。

ビヤツカ「イシ！！ イシ！！」

ビヤツカはイシの名を何度も呼んだ。

人間は眠っていた鬼達をことごとく捕まえ、槍で突き、刀で斬って殺した。女や子供にさえ容赦しなかった。

兵士の何人かがビヤツカに目をつけ、槍を構えて走り寄って来た。

ビヤツカは咄嗟に向かつて来る槍を一本掴んで止めたが、二本の槍が肩と脇腹に突き刺さった。

が、痛みよりも別の思いが勝り、槍を奪って兵士達を一息に蹴散らした。勢いで槍が真ん中から折れた。

ビヤツカはイシの声がした方へ走った。

イシよ、イツカクよ、無事であつてくれ。そう願いながら。

ビヤツカ「イシ！ イツカク！」

ひしめき合う鬼と兵士を何度となく押し退けながら、声の限り呼び続けた。

火の手の及んでいない家の一つによじ登り、屋根の上からイシを探した。夜は明け始めており、東の空がうつすらと明るくなってきた。

その朝明けの光の中に、よく見慣れた緑色の体をした者が倒れているを見つけた。

ビヤツカ「まさか……」

サンゴだった。こちらに向かつて倒れており、彼の生首は胴体から二、三步離れた所に無残に転がっていた。

ビヤツカ「サンゴー!!」

ほんの少し前まで会話していた親友が、そこで死んでいた。

声に気付いた弓兵が、ビヤツカめがけて矢を放った。

ビヤツカ「があっ!」

矢は一瞬のうちに額に突き刺さり、ビヤツカはその衝撃で地面に転がり落ちた。

あまりの出来事に気が狂いそうだった。

ビヤツカは怒りと焦りと悲しみと、様々な感情に押し潰されそうになりながら、やつのことで額の矢を抜き、イツカクが寝ているはずの家へと走った。

到着する頃には、疲れと出血でへとへとになっていた。

ビヤツカの家も既に火が回り、戸が壊されて地面に投げ出されていた。中には血まみれの人間が二人事切れているのが見えた。

ビヤツカ「イシ……イツカク……」

火に囲まれた座敷へ上がり、かまどの方を覗くと、人間の兵士が、馬乗りになって誰かを殴りつけていた。

ビヤツカは獣のように吠えながら兵士に飛びかかった。

兵士は間一髪の所でそれを避けて立ち上がった。

イツカク「父さん……!」

殴られていたのは、イツカクだった。

ビヤツカが体勢を立て直す間もなく、兵士は手近にあった鉈を手に取り、ビヤツカの頭を叩き切った。

ビヤツカはその頭に鉈が食い込んだまま、後ろ向きによろめいて壁にぶつかった。

イツカク「父さん！」

イツカクが顔中から血を流しながら叫んだ。

ビヤツカ「逃げろ、イツカク……」

ビヤツカは言って、突き刺さった鉈を抜いて、気力だけで振り回した。

イツカクは壁の小さな隙間からどうにか這い出て、泣きじゃくりながら父を見守った。

兵士は走って、座敷に転がっていた刀を拾い上げ、ビヤツカと対峙した。

イツカク「父さん、火が……！ 火が……！」

イツカクが必死で警告する。

兵士がビヤツカの気迫に気圧されながらも、隙を見計らって斬り込んだ。

しかし、ビヤツカはこれをいともたやすく鉈で撥ね退け、刀を粉々に碎き飛ばした。そして間髪を入れず、渾身の力で鉈を振り下ろした。

兵士は咄嗟に折れた刀で攻撃を受けようとしたが、鉈は彼の顔をまさに薪のように叩き割り、脳天を貫通して下顎の骨まで達した。

瞬間、兵士が焼け焦げた柱に倒れかかり、かろうじて柱に支えられていた梁が崩れ

落ちてビヤツカを下敷きにしてしまった。

イツカク「父さん！ 父さん！！！」

イツカクが金切り声を上げている。

ビヤツカ「はあ、はあ、ぐう……………！」

ビヤツカは残された力で胸にのしかかった梁をどうにか動かしたが、更にそこへ落ちて来た屋根が追い打ちをかけ、右の腕を完全に押し潰した。

ビヤツカ「があ……………！」

身動きが取れずにいるうちに、やがて火はビヤツカの体に燃え移った。

イツカクの声が遠のいていく。

ビヤツカ「はあ……………はあ……………イシを……………イシを探せ……………」

ビヤツカは朦朧とした意識の中、己の生き様の多くの部分を悔いていた。

生涯最期の日がこんなに早く来ると知っていたなら、もっと一日一日を大切に生きてに違いない。

もっと仕事に精を出し、イシに馬鹿にされても、情けなくても、笑い飛ばせばよかった。

イシを泣かせたりせず、いつまでもまっすぐに愛せばよかった。

イツカクに誇りある生き様を見せてやれたらよかった。

イツカク「父さん！！！」

一方その頃、桃太郎はわずかな兵士と雉野の一族を率いて、森の中で陣を組み、決戦の狼煙が上がるのを待っていた。

眼前には城と思しき建物——ウラの酒蔵——があり、多数の鬼が遠方の山火事を防ぐ為に周囲の木を懸命に切り倒していた。

そして、夜明けとほぼ同時に、その時は来た。

桃太郎は木々の隙間から巨大な火煙が立ち上るのを認めると、雉野に合図を送った。

雉野「放て！」

雉野が号令を発すると、狩人の一族が木の陰から一斉に矢を放ち、酒蔵の周囲を行き来する鬼の一団を一網打尽にした。

それに次いで、桃太郎と兵士達が茂みから飛び出し、酒蔵に乗り込んで行った。

桃太郎は足元の險しさも物ともせず、間合いに入る鬼を片っ端から斬り捨てた。

矢の雨を生き残った鬼は、木を切るのに使っていた斧や、落ちていた木の棒を武器に、激しく抵抗した。

鬼に負けた者は体の一部を吹き飛ばされたり、大きく抉られたりして死んだ。

中でも際立って頭の大きな鬼——ウラ——はまさに怪力無双で、雷のような咆哮を上げながら、犬養軍団の屈強な兵士達を紙のようにちぎっては捨てた。

ウラ「おのれ、赦さんぞ！この薄汚い人間どもめが……！」

ウラの怒声で地面が揺れ、木々の葉が吹き飛んだ。

そのあまりの迫力に、犬養の兵士の一部は武器を捨てて逃げ出してしまった。

桃太郎は刀に付いた血糊を拭い去ると、ウラの前に果敢に立ちはだかつて、言った。

桃太郎「先に悪さをしたのはお前達だ。人間が受けた苦しみを思い知れ」

雉野「放て！」

すかさず、雉野の一族がウラめがけて再び矢を放った。

大量の矢がウラの全身に突き刺さったが、その皮膚はまるで鎧のように分厚く、ウラは全く怯まずに、体に刺さった矢を一瞬で払い落としてしまった。

が、その一瞬の隙に桃太郎が飛びかかり、刀でウラの左目を貫いた。

勝負あつたかに見えたが、ウラは尚も怯まず、拳を大きく振って桃太郎を殴り飛ばした。

桃太郎「ぐほお……！」

桃太郎は胃袋から血を吐き、勢いよく宙を舞って酒蔵の壁を突き破った。

桃太郎「ぐはあ！ あっ……ゲホッ、く……ゲホッ、ゴホッ……」

桃太郎が片膝をついてむせ返っていると、ウラが壁を蹴破って襲いかかって来た。

桃太郎は咄嗟に酒蔵の奥へと逃げ、梁の上に乗って呼吸を整えた。その際、刀の先に何か丸い物が刺さっているのに気がついた。それはウラの眼球であった。

ウラが追って来て、桃太郎が乗っている梁を支える柱を素手でもぎ取った。

桃太郎は梁が落ちる寸前に隣の梁に跳び移ったが、このままでは建物が崩壊するのも時間の問題だった。もしそうなれば、瓦礫の重さに耐えきれず死ぬのは自分だけだと、桃太郎は悟っていた。

ウラが次の柱を蹴り壊し、桃太郎は更に隣の梁へと跳んだ。

いよいよ酒蔵全体が揺れ始めた。

桃太郎は懐に隠し持っていた球を取り出し、一か八か叫んだ。

桃太郎「雪崩！」

ウラが恐らく最後となる柱の前に立った。

その時、犬養によって育て上げられた獯猛な犬が三匹、けたたましく吠えながら酒蔵の中へ駆け込み、飛びかかってウラに噛み付いた。

ウラの注意がわずかに逸れたその刹那、桃太郎は球から突き出ていた紐を引き、梁から飛び降りて、ウラの左目に球を押し込んだ。

瞬間、球は青白い炎を噴いて、ウラの頭部を燃え上がらせた。

鬼火だ。

桃太郎は山上の戦いで未使用の鬼火を手に入れていたのだ。

ウラは鬼火の熱さに暴れ狂い、酒樽を叩き割り、壁や柱を打ち壊し、そこから火を燃え移らせた。

桃太郎「やめ」

桃太郎は犬を率いて酒蔵から走り出た。

一族の者達と共に木の陰から狙いを定めていた雉野は、桃太郎の姿を見て弓を下ろした。

雉野「生きていたか。あれを食らって持ち堪えるとは、まことに頑強な小僧よ」

ほどなくして、酒蔵は音を立てて崩れ落ちた。しかし、ウラは尚も立ち上がり、自身を覆い尽くしている瓦礫を押し退けながら桃太郎の方へにじり寄って来た。

雉野「おのれ、化け物め」

雉野が再び弓を構えた。

やがてウラの姿が見えた。左目の中にはまり込んだ鬼火は尚も彼の頭部を燃やし続けており、まぶたは完全に焼け溶けてなくなり、鼻や唇もそれに近く、骨も歯も剥き出しになっていた。

が、ウラは桃太郎の五、六歩手前で力尽き、煙を上げながら膝をついた。そして、言った。

ウラ「人間め……お前さん達はなんだってこんなひどいことをするんだ、ええ？」

桃太郎「お前達は人を騙し、拐かし、盗み、殺めた。その報いを受けたままでのことだ」

ウラ「言いがかりもいいとこだ。確かに迷惑をかけたのがいたかも知らんが、ここの鬼達はみんな無実だつちゅうの。だったら何かい、人間は盗みも殺しもしないつちゅうんかい、ええ？」

桃太郎は何も言い返せなかった。

ウラ「お前さん達は化け物だよ。化け物……」

ウラが動かなくなつたのを見て、桃太郎は深呼吸しながら刃筋を見極め、一息にそ

の首をはねた。

ウラの生首はそれでもまだ生気を宿しており、残された右目でいつまでも恨めしうに桃太郎を見ていた。

桃太郎は刀に付いた血糊を振り落とすと、鞘に収めた。

桃太郎「あまり近くにいない方が良い。鬼火が毒の瘴気を放っている」

【18】

それから桃太郎の一行は、町の商人が鬼に騙し取られたという財宝を可能な限り船に積み込み、鬼ヶ島を後にした。

山林の炎は留まる所を知らず、遠く離れた海からも煙が見えた。

商人の娘、イシは、ただただすすり泣くばかりで、道中誰とも口を利かず、何を聞かれてもほとんど返事すらしなかった。

男達はイシをどう扱って良いかわからず、船が港に着くまで、ずっとばつが悪そうにしていた。

雉野だけが、

雉野「仕方ないさ。怖い目に遭ったのだから」

と、端的に代弁した。

人間の国に着くと、町の商人が一行の帰りを待っていた。

桃太郎、犬養、猿渡、雉野が船から降りてイシを引き渡した。

商人は走ってイシを抱き締め、泣いて喜んだ。それから、桃太郎の足元に手をつけて頭を下げた。

商人「ありがとうございます、ありがとうございます！ 娘が無事に帰って来て、こんなに嬉しいことはございません！」

ところが、桃太郎はどこか上の空で、何を見るときもなく、視線を前方に落としたまま、黙っていた。

商人「……桃太郎様？」

商人が顔を上げると、桃太郎は我に返った。

桃太郎「いえ。お伊シさんがご無事で何よりです」

商人「ほら、お前からも礼を言いなさい！」

商人が少し厳しい口調でイシに促した。

瞬間、それまでまるで亡霊のように俯いたまま佇んでいたイシが、殺気に満ちた目をした。

桃太郎「礼など要りません」

桃太郎が早口に言い放った。

不穏な気配を察した雉野が割って入り、

雉野「ご息女は今、大変に傷ついておられます。お気を遣わせてはかわいそうかと」

と、商人を咎めた。

——鬼ヶ島での決戦から三ヶ月が過ぎようとしていた。

人間の国では、鬼が悪さをしたという噂をすっかり聞かなくなった。

桃太郎は、船で持ち帰った財宝の大部分を礼として譲り受け、町の外れの静かな場所に家を建てた。余った金はオトと善次に分け与えた。

イシは依然として抜け殻のようで、家業を手伝うことなどとてもままならず、紆余曲折を経て、桃太郎の元へ嫁ぐことになった。

桃太郎は以前にも増してよく働いたが、イシは一向に心を開こうとしなかった。

実の所、桃太郎には、イシが塞ぎ込んでいる理由に関し、漠然とながら心当たりがあった。

桃太郎はあの日以来、鬼ヶ島の酒蔵で討ち取った、あの強大な鬼のことが気にかかっていた。

鬼は言った。「ここにいる者は無実だ」と。

かつて柴刈りの帰り道に襲って来た盗賊団の鬼どもとは、何か違って見えた。

果たして自分のやったことは正しかったのだろうか。そんな葛藤が、いつも心のどこかに引っかかっていた。

もしもあの鬼達が本当に潔白だったとしたら、自分達は果たして、どこで道を間違えてしまったのか。

その答えになる何かを、イシが知っているように思えてならなかったのだ。

そんなある日だった。

いつものように柴刈りに出かけていた桃太郎は、突如胸騒ぎに襲われ、仕事を切り上げてイシの様子を見に行った。

家に着いてみると、イシは腹から血を流して倒れていた。夕飯の支度の途中であったと見えて、かまどは火が着いたままになっていた。そして、血の付いた包丁がイシのすぐそばに投げ出されていた。

桃太郎はすぐさま傷口に布を巻き、彼女を医者へ連れて行った。

幸いにして、急所を外していた為、傷は見た目ほど重くはなかった。

だが、本当に癒すべきは心の傷に違いないのだと、桃太郎は感じ取っていた。

その夜、イシを床に寝かせている時、イシが突然口を開いた。

イシ「なぜお助けになったのですか？」

桃太郎は少し言葉に詰まったが、ただありのままを答えることにした。

桃太郎「きみが死んだら、ぼくは悲しい」

イシ「あなた様は私を愛しておいでですか？」

桃太郎「ああ」

イシ「それならば、尚のこと死なせてくだされば良かったのです。私が死んで悲しいのは、あなた様の都合にございます。私はこれ以上生きとうございません」

桃太郎はイシの目を見た。嘘を言っている目ではなかった。

桃太郎「ぼくを恨んでいるかい」

イシは冷めきった目で桃太郎を見つめ返していたが、にわかには、その目から涙がこぼれ落ちた。

イシ「……はい。私はあなた様が憎くて致し方ございません。恨みの相手の妻になるなど、このような屈辱、死んだ方がましでございます」

桃太郎「ならば、せめて報いを受けさせてほしい。その為とあらば、惜しいものは何もない」

イシが顔をくしゃくしゃにしてむせび泣いた。

イシ「あなた様は……、卑怯者でございます」

桃太郎「……すまない」

イシ「いつそ私を殺してくださいれば良かったのです。さもなければ、捨て置いてくださいれば良かったのに……」

桃太郎は、イシが泣き疲れて眠るまで、何も言い返さずに見守った。

——それから、決戦の日からおよそ一年が過ぎた。

巷では、体が半分骸骨という恐ろしい姿をした鬼を見たとか、鬼火が出たとかいった、気味の悪い噂が流れ始めていた。

奇しくも、桃太郎もその手の悪夢をよく見るようになっていた。

抉り出した目の孔に鬼火を押し込み、首をはねたあの鬼が、あの時の姿でこちらを睨みつけ、野獣のような唸り声を上げる夢だ。

根拠はないが、桃太郎には、あの鬼が今でもあの場所で首だけで生きているのではないかという気がしてならなかった。

とはいえ、鬼ヶ島といえは、犬養の軍勢と鉦夫達が砂鉄を採る為に大勢住み着いており、鬼の残党が生き残っているとは考えがたく、仮にいたとしても、今となっては大した脅威ではない。もはや、鬼ヶ島は人間の島となった。もう、誰も鬼に怯える必要はないのだ。

一方、イシはというと、桃太郎の献身的な支えの甲斐があつてか、いつしか少しだけ前を向いて生きるようになっていた。

相変わらず口数は少ないが、人並みに町を出歩くようになったし、自然と笑うことも徐々に増えて、自尽をほめかすようなこともなくなった。

【20】

ある雨の日、イシは桃太郎の傘に入って、二人きりで散歩をしていた。

小川にかかった橋を渡る途中、イシはふと、雨の景色に目を奪われ、立ち止まって欄干に手を置いた。

桃太郎も、イシを濡らさぬよう傘の中に入れたまま、一緒に景色を眺めた。

川べりには鮮やかな緑色の木々の葉が生い茂り、それをおぼろげに映し出す水面には無数の波紋が現れては消えた。

イシはこの時、鬼ヶ島から帰って来て初めて、生きていて良かった、と思った。

平和な日々を送るうち、鬼ヶ島での出来事は全て一時の淡い夢だったのではないかとさえ思うようになりつつあった。というより、自分にそう言い聞かせようとしていた。

鬼と結婚し、鬼の子を産み、鬼の世界で暮らしたあの頃。

記憶の中には確かにあるが、鬼ヶ島で自分が愛した者達は、今は誰一人この世にいないのだ。

あれがほんの一年前のこととは、イシ自身、信じられなかった。

桃太郎は温厚で器量があり、詮索も干渉もして来ないが、なぜかいつも、不思議とイシの気持ちを感じ取り、尊重しようとする努力していた。

だから、ほんの少しだけ、信じてみたいと思えた。

イシ「——帰りましょう」

桃太郎「ああ」

だが、桃太郎は夫と息子を殺した男だ。その事実には蓋をすることは出来ても、消えることはない。折り合いをつけるには、忘れるほかないのだ。

もしも一つだけやり直せるなら、せめてイツカクだけでも救いたかった。桃太郎ならば、事情さえ知っていれば、あるいは見逃してくれたかもしれない。

——その日の夜。

雨足は強まり、時折雷が鳴っていた。

イシが寢床の中で考え事していると、障子の外で何かが微かに光った。初めは雷かと思っただ、それは一瞬の光ではなく、小さいながらも、障子の向こうでゆらめきながらこちらを照らし続けているようだった。

見間違いかもしれなかった。

だが、イシは何かを引き寄せられるように、その光を確かめたい衝動に駆られた。

静かに寝床を抜け出し、ゆっくりと障子を開ける。障子の隙間から、雨に冷えた空気がイシの顔や首にそっと吹き付けた。

前を見やると、庭の向こうに、青白く光る火の玉が浮かんでおり、降り注ぐ雨粒や水溜まりを密やかに照らし出していた。——鬼火だ。

そして、鬼火のすぐそばには、蓑に身を包んだ一人の男の姿が浮かび上がっていた。

イシはまさかと思い、障子を開けて、その男に姿を見せた。

すると男は、深々と被っていた蓑笠を取って首から後ろにかけ、その顔を露わにした。

イシ「嘘……」

イシは声にならない声で呟いた。

激しい雨の中、青白い光にぼんやりと照らされた男の顔は、右半分の皮がなく、目の玉や頬骨、歯までが剥き出しになっていた。そして左半分は、紛れもなく、かつての夫ビヤツカであった。

ビヤツカ「イシ」

男が低い声で呼んだ。

イシは思いがけず、素足のまま庭に飛び出し、男に駆け寄った。

男は糸で引つ提げていた鬼火を後ろに放り出し、イシの体を抱き止めた。

泥の中に転がった鬼火は消えることなく、地面に溜まった雨滴を音を立てて蒸発させた。

イシ「嘘でしょ……」

イシがビヤツカの胸の中で声を震わせながら言った。

ビヤツカ「……すまなかった」

ビヤツカはその大きな手でイシの頭を包み込むように撫でた。

イシは首を振り、必死で声を殺してすすり泣いた。せき止めていた一年分の感情が溢れ出し、もはや何を言って良いのかわからなかった。

ひとしきり泣いた後、確かめるようにビヤツカの顔を見た。

イシ「あの子は……?」

ビヤツカ「そこにいる」

イシ「生きてるのね……?」

ビヤツカ「ああ。あいつは元気だ」

イシは喜びと安堵のあまり、気を失いそうになった。

と、その時、イシが寝ていた部屋の奥、桃太郎がいる部屋の襖が勢いよく開く音がした。

次の瞬間、刀を手に持った桃太郎が矢のように飛び出して来て、引き抜いた鞘を地面に放り捨てながら、ビヤツカに斬りかかった。

桃太郎「はあああああ!」

ビヤツカはイシを突き放し、糸を引っ張って鬼火を桃太郎の方に投げつけた。

イシ「待つて！」

桃太郎は顔の前に飛んで来た鬼火を一刀両断し、瞬く間に間合いを詰めた。

イシ「もうやめて！！！」

イシが金切り声を上げた。

その時、刀を振り上げていた桃太郎が体をのけ反ってよろめいた。

見ると、桃太郎の胸と腹に、二本の矢が突き刺さっていた。

刹那、ビヤツカが蓑の下に隠し持っていた金棒で桃太郎の刀を打ち、根本から粉碎した。

桃太郎はビヤツカを睨みつけたまま崩れ落ち、胸に刺さった矢を掴んだ。

ビヤツカが桃太郎の鼻先に金棒を突きつけ、両者の動きが止まった。

イシ「二人ともやめて……もういいから……お願いだから」

イシがぬかるんだ地面に尻もちをついたまま懇願した。

桃太郎の家から赤い炎が立ち上った。斬り捨てられた鬼火が家に舞い込んだのだ。

庭の木の陰から、小柄な人影が徐ろに姿を現した。

イツカクだった。

イツカクは大きな弓に矢をつがえ、桃太郎に狙いを定めたままこちらに歩み寄って来

た。

イツカク「お前だな……お前が母さんをさらったんだ……!!」

イシ「イツカク……」

イツカクはイシの声を無視して桃太郎の眼前まで近づいた。弓矢は依然、桃太郎の頭に向いている。

イツカク「探したぞ……。お前が村を焼いて、みんなを殺したんだ……。父さんをこんな姿にして……!!」

イシ「やめて、イツカク……」

炎に照らし出されたイツカクの顔は、少年らしいあどけなさが消え、怒りと悲しみに満ち溢れ、まさに鬼の名にふさわしい形相をしていた。

イツカク「心のない化け物め！ 鬼ヶ島のみんなを殺しただけでは飽き足らず、あまつさえ母さんをも傷つけた!!」

イシが立ち上がり、弓を構えるイツカクの腕を恐る恐る掴んだ。

イシ「違うよ……!!」

イツカクが泣きべそをかいてイシの顔を見上げた。

イツカク「母さん、こいつを赦すの……?」

イシは桃太郎の顔を見た。

桃太郎は何も言わずひざまずいたまま、覚悟のこもった鋭い眼でイシを見つめ返した。体内からこみ上げる血でむせ返るのを抑えながら、かろうじて息を切っていた。

イシ「いいえ、赦さない……」

桃太郎は身動き一つせず、視線だけをわずかに落とした。

ビヤツカが桃太郎を見下ろしたまま、金棒を蓑の中にしまった。

ビヤツカ「つけて来るなよ。さもなくば殺す」

そう言つて、蓑笠を被り直し、イシの手を握った。

その時になつて、イシはビヤツカの右腕がないことに気付いた。

イシ「どこへ行くの？」

ビヤツカ「わからない。三人で探すしかないだろう。おれ達が生きていける場所を」

イシはもう一度振り返つて、桃太郎を見た。

桃太郎は口や鼻から溢れ出る血を拭うこともせず、じつと痛みに耐えながら、イシを見つめていた。

イツカクが何か言いたげに桃太郎を見下ろしていた。

ビヤツカ「来るのか？ 来ないのか？」

ビヤツカが尋ねた。

イシは桃太郎と見つめ合ったまま、少し間を空けて、

イシ「……行くよ」

と答えた。

それから、ビヤツカに手を引かれるように歩き出した。

イツカクも桃太郎に侮蔑の視線を残したまま、二人の後に続いて歩き出した。

イシは桃太郎の姿が見えなくなるまで、何度も振り返った。

桃太郎は最後まで、燃え盛る家を背に、膝をついたまま、無言でイシを見つめていた。